2006年冬　第44号

# ダルニー通信

44

## ラオス奨学生数の報告

# 2006 年度は 6,971 名

### 昨年度は 6,436 名

2006 年度のラオスの奨学金提供数は以下の通りとなりました。ご支援ありがとうございます。

| 学年 | 小 3 | 小 4 | 小 5 | 小学生　計 |
|---|---|---|---|---|
| 奨学生数 | 2,410 | 2,253 | 1,682 | 6,345 |
| **学年** | **中 1** | **中 2** | **中 3** | **中学生　計** |
| 奨学生数 | 183 | 197 | 246 | 626 |

2006 年度のラオスの子どもたちへの奨学金数は、みなさまのご協力のおかげで新記録を達成いたしました。これで多くの子どもたちが勉強を続けることができます。しかし、残念ながらまだ多くの子どもたちが奨学金を必要としています。来年度はさらに多くの方に呼びかけ、少しでも多く奨学金を子どもたちへ届けたいと願っています。今後ともご協力下さいますよう、お願い申し上げます。

ダルニー奨学生と学校（ラオス・カムアン県ポンスン村）

## ■ 奨学生「今度は私が困っている人のために」

2006 年 9 月 19 日タイで軍事クーデターが起こったとの一報が入り、子どもたちへ影響が無いかと心配しました。幸い武力衝突は発生しておらず、市民生活も平常を保っているとの事、一安心しました。2007 年は日タイ修好 120 周年にあたり、子どもたちの将来のためにも今後の正常化と社会の健やかな発展を願っています。

さて、レバノンやイラクのように、世界では戦火・紛争が絶えません。そして、その最大の犠牲者は女性や子どもなどの社会的弱者です。また、日本や米国などの、いわゆる先進国でも子どもたちを巻き込んだ痛ましい事故・事件が頻発しています。

ラオスの奨学生ノイ（中央）

日本民際交流センターは 2007 年に創立 20 周年を迎えます。世界中で悲しく痛ましい事件が続く中で、声を大にして誇れることは、かけがえの無い教育という皆さんからの贈り物を、子どもたちへ届ける手助けができたことです。そして子どもたちの様子をご報告させていただくことにより、相手を思いやり、心と心を結ぶ、美しき民と民の協力のお手伝いをさせていただいたことです。

皆さんのご協力は大きな種をまいています。例えば、当センター15 周年を機に来日した元奨学生ポットさんは「遠く離れた人から希望を与えられ、どんなに苦しくてもがんばれました」と話し、そして今度は自分が社会に貢献したいとがんばっています。また、ラオスの奨学生で小学校 4 年生のノイちゃん（写真上）は、ラオス訪問ツアーで村を訪れた自分のドナー「お父さん」へ帰り際にそっと手紙を渡しました。手紙には「将来、今度は自分が困っている人や村を助けることができる人になれるようがんばりたい」と書いてありました。このように子どもたちの心に灯った小さな種がやがて大きく育ち、世の中を良くし、新しい歴史をつくっていくことを確信しています。

**タイ事務局（EDF）レポート** 元奨学生の消息

# 強い意志に運が味方し、「ドナーに会いたい」という夢が実現

**元奨学生のパウィニーさんは感謝の気持ちから、97～99 年の 3 年間、中学就学の支援をしてくれたドナーの名前を今でもしっかり覚えています（その名前をこれまで何回口ずさんだことでしょう！）。そして「いつかその人に会える」と思っていました。その希望を実現するために起こした彼女の積極的な行動と強運が、ついに長年の夢を実現させました。**

ホテルのロビーで会うパウィニーさん（左）と松下さん（右）

ローイエット県出身のパウィニーさんは現在、看護士養成専門学校の 4 年生です。陽気で行動的な女の子だった彼女は小さい頃両親が離婚し、２人とも他の県に去ってしまいました。そのため、祖父母と一緒に暮らし、農作業や家事を手伝ってきました。そのとき以来、パウィニーさんにとって祖父母が両親になりました。苦しい生活でしたが、中学に進む際、運良く日本人のドナーから奨学金の提供があり、中学校に 3 年間通うことができました。

松下信也さんは 1995 年にアユタヤに工場を建設中のホンダ四輪製造会社の社長としてタイに赴任し、ダルニー奨学金を支援しました。そして 97 年度の奨学金がパウィニーさんに提供され、彼女の人生が大きく変わったのです。

パウィニーさんが奨学金を手にしてから約 9 年後の今年 8 月、2 人は松下さんが出張でバンコクに来る際にいつも滞在するホテルのロビーで会いました。支援をしている間、証書と一緒に送られてきた写真の顔を覚えていた松下さんは、彼女の顔を見た瞬間、「あのときの奨学生の女の子だ」と思ったそうです。写真の顔の特徴が残っていたからです。

## ■ ドナーからのプレゼントに心動かされ

奨学生だった頃、パウィニーさんは松下さんから文房具セットのプレゼントを受け取ったことがあります。「奨学金をもらえると分かったときも、もちろん嬉しかったのですが、それ以上に松下さんから送られた文房具セットのプレゼントが忘れられないぐらいに嬉しかったのです。誰からもプレゼントを貰ったことがなかったからです。私のことを考えてくれる人がいるんだなあと思って」。そして、プレゼントを受け取ったとき、「いつの日か、日本を訪問するチャンスがあるかもしれないから、日本語を勉強したい」と思いました。

## ■ セミナーの通訳が江田さんだった！

そして今夏、その夢が実現しました。日本で開催された JICA 主催の地域保健看護セミナーに参加する 20 名の生徒に選ばれ、来日したのです。「セミナー参加資格を得る面接試験のとき、ダルニー奨学金について話をし、なぜ私が日本に行きたいのかを説明しました」。そして合格。さらに幸運なことに、そのセミナーの通訳が、研修旅行やタイ人の奨学生来日などの機会にしばしばお手伝いをしていただく江田優子さんでした。パウィニーさんは「マツシタノブナリ」というドナーの名前をしっかり覚えていて、江田さんにその名前を告げました。江田さんは早速日本民際交流センター事務局に伝え、日本とタイの事務局が連携して松下さんを必死に探して連絡し、今回の対面となりました。

パウィニーさんは松下さんに会うため、バンコクから約 700 キロ離れた南部スラーターニー県にある学校の寄宿舎からバスに 10 時間乗って来ました。2 人にとっては本当の家族との再会を果たしたような感激をしました。松下さんは、パウィニーさんがこんなに立派に成長され、自分の支援が期待以上に報われたことに、何度もパウィニーさんの手を握ってお礼を言っていました。（タイ事務局のニュースレター「ダルニーニュース」より転載）

後記：後で江田さんに尋ねたところ、このセミナーの通訳は 1 人ではなく複数で、しかも江田さんはたまたまパウィニーさんの隣に座ったそうです。

# 偶然が重なりタイへ！

村瀬 岳男

数年前のある日、民際センターの高橋さんから突然電話がありました。「村瀬さん、マナス君のこと覚えてます？」「はあ？」「彼が留学してきたんです。日本に」「いったい何のこと？」そんなやりとりの後、やっと事情が飲み込めました。かつて、私の寄付金で学校に行っていたタイの少年が、長野県の高校に留学生として来日したというのです。マナス君がホームスティ先でこの話をしたところ、なんとそのホームスティ先がドナーの三好さん（ドナー連絡会「はじめのいっぽ」の世話人）で、彼女が民際センター経由で連絡してくれたのです。

「彼が会いたいといっています。会えますか？」

それから、1ヶ月後だったろうか。私たちは民際センターの事務局で初めて会った。マナス君、三好さんのとその家族、高橋さん、私、そしてボランティアで通訳をしてくれたスニサーさん。当時のことはほとんど覚えていませんが、彼が「日本のお父さんと呼んでいいですか？」と尋ねたことだけは強く印象に残っていました。彼の留学期間は1年で、タイへの帰国前にもう一度会いたいと三好さん経由で連絡が入り、再度東京で会ったのが最後になりました。

マナス君（右端）と村瀬さん（真ん中）。左はタイ事務局長のサンペット。タイ事務局で

そして昨年の3月、民際センターのタイ語教室でスニサーさんに再会。なんとタイ語の先生だったのです。この再会が縁で昨年の9月からスニサーさんにタイ語を習うことになりましたが、今年になって先生のすすめもありタイへ旅行することに。そこで、数年来会っていないマナス君のことを思い出し、三好さんからメールアドレスを教えていただき彼に連絡。バンコクで会う約束をし、9月2日市内のホテルで感動の再会をしました。

タイ東北部のチャイヤプームからわざわざ会いに来てくれたマナス君。21歳になった彼は、現在専門学校でコンピュータの勉強をしていますが、来年には大学に進みたいと考えています。若い彼と過ごした2日間でしたが、希望を抱き勉強する青年に接することができ、心に残る思い出の旅となりました。

## 【特別なご支援のお願い】ラオスの数学教育のレベル向上に向けた人材育成事業

**ラオスでは、小学校しか卒業していない人が教師として小学校で教え、中学校卒の教師が中学校で、高校卒の教師が高校で教えているケースが一般的です。そのため、教科書は全教科揃っていますが、教科書をうまく使いこなせる先生は少ないのが現状です。教師の質の向上をめざした訓練も実施されていますが、教師を教える講師の側にも質の問題があり、期待される効果は上がっていません。**

**ラオスの教育レベル向上のためには、経験と知識に裏打ちされた統一的教授方法の確立が最重要課題と言えます。教師の能力の現状を考慮に入れ、かつ費用対効果の観点から、それを短期間内に実現するには、適切な教師用指導要領の作成が最良の方法であろうと思われます。そこで、このような指導要領の作成に携わる優秀な人材を育成することが急務であると考え、この事業を開始しました。**

**本事業のプロセス及び目的は、ラオスの現役高校教師から有能な人材を選抜し、タイ国立コーンケーン大学の教育学部修士課程に留学させ、卒業後はラオス教育省内で教師指導要領を作成し、同国の教育レベル向上を中枢となって担う人材を育成することです。同事業の協力に関し、ラオス教育省およびコーンケーン大学と正式な覚書を交わしました。2004 年に入学した第一期生 4 名は本年 12 月に晴れて修士課程を修了する見込みで、今年は第二期生 1 名も新たに入学しました。**

**本事業を推進する上での一番の課題は、有効な選考制度の確立です。ラオスは社会主義国家ということもあり、これまでは政府が推薦する人材の中から選考せざるを得ませんでしたが、この度、ラオス全土での公募、現役の先生なら誰でも受験が可能という募集方法が認められたことにより、優秀な人材をより広く選考することが可能となりました。このことにより私たちは本事業への自信を一層深め、ここに新たに第三期生 2 名分の奨学金のためのご支援をお願いすることとなりました。**

**2007 年度教育学部（数学専攻）修士課程入学の第三期生へのご支援をお願いします。**

**修士課程入学から修了までの 3 年間の奨学金（学費及び生活費等）は年間（1 回）70 万円で、3 年間（3 回）のご支援になります。お申し込み締め切りは2006 年 12 月末日です。詳しくは事務局まで（担当：横山、本田）。**

## 学校による支援の取り組み報告

### ケース①

# 厳しい世界を知る手がかりとして

北海道野幌高等学校教諭　古主　信

学校全体の取り組みを理解してくれた生徒会のメンバーと古主先生（右端）

今年の学校祭「通称＝野校祭（のっこうさい）」で、ダルニー奨学金を生徒会が取り上げてくれ、学校全体として寄付をすることになりました。これまでは、学校祭で焼き鳥やお好み焼き、トロピカルジュースなどの販売をクラス単位で行い、その売上金は各クラスの裁量に任されていました。私は前任校（北海道留辺蘂高等学校）にいる時、学校祭での収益金を寄付していたので、それをそのまま本校でのクラスの取り組みとして生徒たちに紹介し、1 口ですが 2 年前から寄付させていただいておりました。今年は 3 年生の担任になったこともあり、生徒会に呼びかけたところ快く理解してもらい、学校全体として参加しようということになりました。初年度ということもあり、各クラスの利益の 10%を集めさせてもらいましたが、最終的に総額 5 万円が集まり大成功の学校祭となりました。

私は平成 11 年から 13 年までの 2 年間、青年海外協力隊員としてタイで子供たちに野球を教えてきたのですが、現地でダルニー奨学金の支援を知り、帰国後、もっと普遍的な支援をしたいと考えていたので、それ以来、個人的に奨学金への支援を続けてきました。子供たちに世界の現実を知ってもらいたい、間接的にでもボランティアに参加させてあげたいなどの気持ちから生徒たちへ呼びかけ、理解をしてもらい、ともに参加してきました。今後も、さらに多くの子供たちに学校へ行ってもらえるように、積極的に参加して行きたいと思います。そして、少しでも世界の厳しい現実を理解し、そのために行動できるような生徒を育成して行きたいと考えております。

**団塊の世代の方々へ**

**Let's “貧困削減に向けて何かをしよう”**

**「団塊の世代が、世界の貧困削減に向けて何ができるのか？何をしたいか？」、このようなテーマで一度、関心のある方（性別不問）だけで民際事務所のある東京・新宿区の早稲田大学界隈で集まりたいと思います。日時は関心のある方の最大公約数をとり、設定いたしたく思います。同じ世代で諮問委員の児玉まで e-mail または書面でご連絡ください。なお、地理的に、時間的に参加できない方は E-mail アドレスをご連絡ください。kodama@minsai.org**

### ケース②

# 白鳥を迎える里の高校から

新潟ドナー連絡会　世話人　赤石隆夫

「広報とバザー売り上げで奨学金を目指します」という新潟県立阿賀野高校のパワフル先生の突然の申し出に、文化祭に出かけた越後の世話人です。玄関を入り、焼きそば、ドーナツ、金魚すくいには目もくれずひたすらボランティア同好会の展示教室へ。顧問の横堀先生の奮闘、水原市役所、PTA、近在の方々からの協力もあったと聞きます。

あっ、新潟ドナー連絡会提供のグッズもあります。300バーツで仕入れたシルクの象さんネクタイが500円！？1バーツが3円とすると・・・思わず買い戻したくなるようなお値段です。そこへお越しの校長先生の手がスーッとネクタイへ・・・さ、さすがお目が高い！選球眼に迷いがありません。すかさず駆け寄る世話人。ネクタイにかこつけ生徒さんと横堀先生への感謝を織り交ぜ、ご挨拶とお礼です。

ボランティア同好会のメンバー。横堀先生（右端）の隣が部長の五十嵐麻衣さん

実際、2年生の五十嵐麻衣部長を頭に、会員の皆さんの楽しみながらの奮闘には敬服しました。突然現れた世話人の取材にも爽やかに応対してくれ、数々のボランティア体験もある彼らです。地元瓢湖に飛来する白鳥を毎年暖かく迎える越後の五頭山の里ならではの若人の暖かさに感動し、そして日本の行く末にもちょっと安堵した感傷取材でした。憶うに、実は若い人たちが私たち日本の大人たちに未来の手がかりを分かりやすい形で提示してくれているのかも知れません。イサーンで出会う奨学生たちが希望であるように、彼らもそうであることを再認識した帰路の校庭でした。

民際スタッフのラオス出張記

## 子ども達のために、移動の困難をものともせず

### ラオス事務局の奮闘ぶりに感謝！

民際スタッフ　高橋厚子

8 月、小学校校舎建設事業等のためラオスに出張しました。ミンサイ・ラオス事務局がある首都ヴィエンチャンから奨学金提供対象地域の中南部 4 県を、3 つの団体から寄付された四駆車で走りました。運転はカムアン県オフィス責任者で日本での留学経験もあるジョイで、ラオス事務局長のティック、それに校舎建設担当のネンも一緒です。

まず 16 校目の学校校舎寄贈竣工式が行われる中部カムアン県ポーサイ村（7ページ参照）まで行くのに、車が縦揺れする悪路が続きました。幹線道路は ODA のおかげで舗装されている所が多いのですが、奨学金対象地域の奥まった農村では赤土のでこぼこ道が続きます。その上、大雨が続いたため道には多数の水溜りができ、水没した畑や水浸しの居住地（写真左上）も数多く見受けられました。

カムアン県まで約 5 時間、その後、サワンナケート県とサーラワン県を経由して、校舎建設中の 17 と 18 校目があるセーコーン県まで約 6 時間、合計約 11 時間の道のりでした。同県にあるパクトン校（群馬県板倉町が寄付した 3 校目校舎）を訪ねた後、車がぬかるみにはまってしまう事故がありました（写真左下）。ジョイらはすぐ裸足になり、車を動かそうとしましたが、びくともしません。ぬかるみとの格闘が 1 時間以上も続いた後、近くの村人たちの助けでようやく抜け出すことができました。

ラオスの地方の幹線道路では、日本のような交通渋滞に悩まされることはありませんが、水牛・山羊・豚・犬などが道路に寝そべっていて、クラクションを鳴らしてもどいてくれません。こんな災難もありました。道路の真ん中を歩いていた水牛を避けようとしたのですが、水牛が突然向きを変えぶつかってきたため、跳ね飛ばしてしまったのです。水牛は死んでしまい、四駆車の右ライトはもぎ取られました。「今までこんなことは一度もなかった。水牛に悪いことをした」とジョイはショックを隠せませんでした。

このような厳しい状況にもかかわらず、ティックも（写真下右から 4 番目の女性）ジョイも（写真下後列男性）口を揃えて「子どもの頃、非常に貧しかったけれど、やりくりして学校に行かせてくれた親には感謝している」「奨学金支援がなければ小学校に行くことができない地方農村部貧困家庭の子どもたちのために、これからもがんばります」と教育支援活動への情熱を語ります。

今回の現地訪問で、奨学金事業を実際に担っているラオス事務局の苦労を肌で感じ、感謝の気持ちがふつふつと湧き、改めて「頼れるパートナー」であることを実感しました。

協力企業紹介

## 一人でも多くの奨学生が誕生することを願って

株式会社 資生堂　社会貢献くらぶ・労働組合

資生堂 社会貢献くらぶでは「良き企業市民の輪を広げる」ことを理念に掲げ、社員の社会貢献意識の醸成、ボランティア活動の支援に取り組んでいます。社会貢献くらぶには、グループ従業員が継続的に毎月の給与から資金の積み立てを行い、NPOやボランティア団体に寄付をする「花椿基金」があり、会社も従業員寄付額と同額のマッチングギフト（寄付金または商品の提供）を行っています。また、自然災害時には会社としての寄付だけでなく、従業員から義援金を募集し、被災地でお役に立てていただいています。

当くらぶでは社員の社会貢献意識醸成の一つとして、従来から書き損じハガキをはじめ、使用済みカード・使用済み切手を収集する「集めてボランティア」活動を行ってきましたが、労働組合も独自に収集ボランティア活動を行っていました。途上国の子どもたちへの支援、社員のボランティアマインドの醸成という共通の目的を持って活動していたことから、昨年度、初めて社会貢献くらぶと労働組合の共催で「集めてボランティアキャンペーン」を行いました。労働組合がポスターや回収箱を作成・設置し、各職場で呼びかけたところ、前年度の約2倍にあたる4615枚の書き損じハガキが集まり、共催により予想以上の相乗効果を得られました。しかし、ダルニー通信に掲載されている他企業の活動内容を拝見すると、当社の活動はまだまだ不十分だと思い知らされます。

今年度も労働組合と共催で「集めてボランティアキャンペーン」を行います。今後、少しずつでも活動の輪を広げ、一人でも多くの奨学生が誕生するようキャンペーンに取り組んでいきたいと思います。

オリジナルのポスターとハガキ回収箱

**ラオス校舎建設事業の意義**

# 「世界市民」誕生の第一歩

## 人類全体を自分の民と思える人物の育成、読み書きから

**校舎寄贈者　ブレント・デ・シェン**

今年 8 月、寄贈した校舎が完成し、その贈呈式に参加するため、デ・シェンさんはラオスに出かけました。このラオス訪問を機に、ラオス校舎建設の意義について、デ・シェンさんが記事を寄稿してくれました。

近年は、世界一の長者とされるビル・ゲイツが創立したゲイツ財団をはじめ、ODA（政府開発援助）だけでなく、NGO（非政府組織）や私立財団による開発援助が注目されています。どういう援助が最も効果的であるかの討論は当分続きそうですが、ゲイツ財団などが注目している伝染病や公衆衛生と、さまざまな団体が目的としている初等教育の普及は、明らかに開発援助の欠かせない柱の 2 つでしょう。ここでは、初等教育の大切さを考えてみたいと思います。ちなみに、他のドナーと同様、私にとってラオス人、タイ人との個人的な接触が非常に有意義な経験であり、そしてこれからもその接触、その関係を深めていきたいと思っています。しかしここではもう少し抽象的な形で教育の意味を考えることにします。

日本やヨーロッパでは、識字率が 100 パーセントに近い状態が当たり前になっている結果、いわゆる先進国においても大衆識字は比較的最近の 1870 年代以降のことだと忘れられがちです。しかし、19 世紀前半まで「贅沢品」の 1 つだった文字の読み書きは、21 世紀前半では、個人単位で考えても社会単位で考えても必需品とまでなっているでしょう。文字の読み書きができる利点としてよく挙げられるのは、詐欺からの自己防衛、衛生や栄養の知識増加に伴う乳幼児死亡率の低下などであり、識字率が 68.7 パーセントにとどまり、178 ヶ国中の 138 位（国連、2005 年）となっているラオスには確かにそのような効果を期待できるでしょう。また、識字率の上昇は経済的発展にもつながるはずです。しかし、私は他にも利点があるように思います。文字が読めるようになるということは、遠くにいる人や昔の人の考えを直接に知ることができ、視野が大きく広がります。21 世紀の地球が一番必要としているのは、民族や国籍の境界を越えて人類全体を自分の民に思える人物かもしれません。もちろん読み書き能力だけではそのような「世界市民」が誕生するわけではないのですが、その理想への第一歩とも言えるのではないでしょうか。

**● 同行した民際スタッフ、高橋厚子のコメント**

**校舎贈呈式の挨拶の中で、デ･シェンさんは参加した村人達に「これからも学校を見守っていきたい」と語った後、2 つのお願いをしました。「まず、校舎を有効に使って頂くと同時に、維持や修理も積極的に行ってほしい。次に、家事や農業で子どもに手伝ってほしい気持ちもわかりますが、子どもにとっては教育が第一優先。教育は将来への投資です。長期的に考えれば村および国全体の発展につながります」。 このスピーチに、思わず「同感！村人よ、お願いしますね」と心の中で叫んでしまいました！**

新校舎の前で生徒たちと一緒に（上）。支援する奨学生宅を訪れるデ・シェンさん（右）

## ラオス小学校校舎建設地及び寄贈者一覧

### ■ 2006 年 8 月までに完成した校舎 ■（敬称略）

1. カムアン県ナーカーム村：1998 年 3 月完成
   寄贈者　東京晴海ライオンズクラブ
2. カムアン県タードゥア村：1998 年 3 月完成
   寄贈者　志治（山梨県在住）
3. セーコーン県パクトンタイ村：1999 年 6 月完成
   寄贈者　群馬県板倉町町民
4. カムアン県ノーンホイ村：1999 年 10 月完成
   寄贈者　木村（新潟県在住）
5. セーコーン県ジュンラー村：2000 年 2 月完成
   寄贈者　故山口（東京在住）
6. カムアン県ポンサワン村：2000 年 9 月完成
   寄贈者　「アジアの子供たちに学校を贈る議員の会」
7. カムアン県シアンレー村：2001 年 3 月完成
   寄贈者　名進研（名古屋中心の進学予備校）
8. セーコーン県ホーセー村：2002 年 8 月完成
   寄贈者　甲府城北ロータリークラブ
9. カムアン県ラマラー村：2002 年 7 月完成
   寄贈者　富士通ユニティ労働組合他富士通グループ会社
10. カムアン県ラオカー村：2003 年 5 月完成
    寄贈者　古屋（埼玉県在住）
11. セーコーン県ピアマイ村：2003 年 11 月完成
    寄贈者　富士通ユニティ労働組合
12. サワナケート県シビレイ村：2004 年 7 月完成
    寄贈者　大同生命国際文化基金
13. セーコーン県ピアマイ村：2004 年 10 月完成（県教育センター）
    寄贈者　大同生命国際文化基金
14. カムアン県ソンホン村：2005 年 10 月完成
    寄贈者　広島女学院同窓会、田中（名古屋在住）
    共同支援
15. サワンナケート県ノンファイ村：2005 年 12 月完成
    寄贈者　海老原（東京在住）
16. カムアン県ポーサイ村：2006 年 8 月完成
    寄贈者　ブレント･デ･シェン（東京在住）

※現在、さらに 3 校を建設中

新企画！「自転車贈呈と自転車教室も」

## 来年（2007 年）2 月タイ研修旅行のごあんない

# タイ東北地方ムクダーハーン県へ 5 泊 6 日の旅

**この旅行は従来の研修旅行のメニューに加えて、自宅と中学校の距離が離れているため、通学するのに大変困難な状況にある子ども達を支援するために学校に自転車を寄贈し、併せて修理教室も開催するユニークな企画です。場所はメコン川沿いのムクダーハーン県で、村に 2 泊します。昨年、予備調査も兼ねてノーンカーイ県への旅行をしましたが、参加者にも学校側・村側にも大好評でした（下欄「参加者の声」参照）。**

**今年の 6 月、タイブリヂストンがタイ事務局（EDF）を通じて東北地方の 3 つの県に 300 人の奨学金（3 年間）と 300 台の自転車を寄付しましたが、自転車はまだまだ不足しております。この旅行に参加して、ムクダーハーン県にいる奨学生との面会や生徒・先生・村人との交流はもちろん、自転車贈呈の支援も行いませんか。日程は以下のとおりです。ご希望の方は、80 円切手を貼った返信用の封筒とともに民際センター事務局まで資料をご請求下さい。**

**日程**：2007 年 2 月 5 日（月）～2 月 10 日（土）の 6 日間
**料金**：185,000 円（自転車 1 台分の代金込み）、ドナーでない方は上記の金額の他に 1 人分の奨学金が必要です。
**定員**：最小 12 名～最大 25 名
**申込**：資料請求は 12 月 20 日まで。定員になり次第、締め切ります。
※上記の料金は 9 月現在のもので、飛行機のオイルチャージ（燃料代金）がさらに上がった場合は料金が変更になることもありますので、予めご了承下さい。

共同企画：JICO＜(特活)日本地域協力機構＞
後援：（財）自転車産業振興協会

昨年の旅行で実施した自転車教室（ノーンカーイ県で）

## 前回の旅行参加者の声

**◆宮澤　茂雄さん：　山梨県甲府市在住　74歳**
貧困な環境下でありますが、子どもたちの表情がとても明るいのには、驚きました。村に滞在した2日間は、家畜と一緒の生活を楽しみ、自然との一体感を心底から味わいました。まるで、自分の少年時代をほうふつさせる光景に感動を覚えました。体力の続く限り、この自転車教室ツアーに次回も参加します。

**◆田中　航一郎さん：　東京都江戸川区在住　27歳**
普通の旅行では味わえない、大変貴重で、面白い体験をしました。食事は美味しく、特に学校でのタイ料理は最高の味でした。同センター・タイ事務局スタッフが行き届いた世話をしてくれて非常に助かりました。また、彼女たちとの、英語の会話は楽しく良い思い出となりました。村では、多くの子どもたちから、年齢を超えて、人生や生き方を学んだような気がします。この子どもたちを見ていると純粋に親の面倒をみたいという気持ちにかられ、つい自分自身の父親のことが気になり、バンコクでは初めて父へネクタイを購入しました。

定年時代　平成18年7月下旬号
定年時代
タイの子どもに自転車を
出前教室も実施

**右の記事は 2006 年 7 月 18 日、朝日新聞東京版に折込まれました「定年時代」（月 2 回 150 万部発行）の記事「タイの子どもに自転車を」で、今回の旅行のお話を説明しています。私（児玉）は、ブリヂストンサイクルに 37 年間勤務し、05 年 5 月から日本民際交流センターの諮問委員として働き、主にタイの自転車支援を企画・実施し、今回の研修旅行を担当しています。**

**ブーンライ保健衛生プロジェクト報告**

# 31名の生徒がマラリアに感染

## ラオス・セーコーン県のある小学校

**マラリアは肺病・下痢とともにラオスの 3 大死亡原因の１つです。ユニセフの「世界人口白書 2005」によると、5 歳未満の乳幼児の死亡率は 1000 人中 266 人です（日本は 9 人）。ラオス児童が学校に行けない一因として、保健衛生環境が劣悪であるため病気で子どもの死ぬ確率が高いから子沢山になり、その結果、両親はすべての子に教育費を捻出できないという側面があります。ラオス事務局が実施している保健衛生プロジェクトは、保健衛生環境の改善を通じて教育機会の普及を図ることを目的としています。**

セーコーン県のカンドン小学校に通うポーンサイ（写真右）は今年、発熱と悪寒、下痢などの症状が出ました。お父さんが医者を呼んだところ、マラリアと診断され、3 リットルの血清といくつかの薬をもらい、発熱や悪寒は一応治まりました。診察代は薬代込みで 2,118 円でしたが、ブーンライ健康保健プロジェクトの基金から 1 回に支払う最高額の 50,000 キップ（約 574 円）が支給されたので、お父さんが支払った額は 1,544 円でした。

少数民族のカトゥー族に属するポーンサイの家族はかなり広い畑を持ち、3 人の妻とともに畑仕事をして約 5 万円の年収があるので（カトゥ族の男性は複数の女性と結婚する習慣があります）、診察代と薬代もそれほど大きな負担にはなりませんでした。しかし、平均年収が約 12,000 円の同県では、もし子どもがマラリアにかかったら、ポーンサイと同じレベルの診察と薬を受けることは難しく、医師の資格のない民間医療師に治療を頼んだり、家に薬があれば薬を与えて終わり、薬がない場合にはただ寝かせるだけという家庭が多いようです。

カンドン校は近くに小川が流れ、森に囲まれているため、付近に湿地帯が多く、そこがマラリア蚊の生息地になっています。今年度（2005 年 9 月～2006 年 8 月）、同校ではポーンサイも含め 31 名の生徒がマラリアの症状を訴え、ブーンライ基金から全員にそれぞれ最高 50,000 キップ（574 円）を支給しましたが、その支給が無ければ、治療や薬を受けられなかった生徒もいると思われます。

### ■ 低い保健衛生レベルと教育の貧困

ユニセフの統計によると、ラオスでは適切な衛生施設を利用する人の割合は全国平均で 24%で、都市 61%、農村 14%でした（2002 年）。マラリアに関しては、発熱した 5 歳未満の児童のうち、抗マラリア剤を受ける子どもの比率は 9%に過ぎません（1999～2004 年）。これはかなり低い率で、例えば、アフリカのガーナは 63%、ケニアは 27%です。

脆弱な医療システムは教育の貧困を招きます。ブーンライ保健衛生プロジェクトを実施している別の小学校の校長先生は「各学年の 10～15%が怪我や病気で学校を休んでいます」と嘆いていました。

## ブーンライ保健衛生プロジェクトご支援のお願い

健康診断を受けるラオスの生徒

**2002 年にスタートした同プロジェクトは、初年度に薬箱や体重計・身長計を学校に支給し、年 1 回、医者と看護婦からなる医療チームを派遣して学校で健康診断を実施します。健康診断の結果、「処方の必要あり」と診断された生徒に症状に応じた薬を支給し、さらに病院で治療を受ける必要がある場合には、1 回の治療につき最高 5 万キップ（574 円）で年 2 回（合計 10 万キップ）まで支給されます。**

**2005 年度、同事業は 6 校の小学校で実施されました（医者の治療を受けた生徒は 6 校で 56 名）。基本的には日本からの寄付金で運営されていますが、「自分たちの事業」という意識を生徒にもってもらうため、及び財政を補う理由から、生徒から 1 人毎月 500 キップ(約 5.7 円)の会員費を徴収しています（支払えない生徒もいます）。財政が厳しくなれば、病院で治療を受けることのできる生徒は限られてしまいます。こうした事情を考慮いただき、是非、皆様のご支援をお待ちしています。寄付は 1 口 5 万円からです。80 円切手を貼った返信用の封筒を事務局に送っていただければ、折り返し資料をお送りします。**

■■■民間団体の書き損じはがき収集の取り組み

## 地域での国際交流活動の一環として

ねあがりカライダスコープ

スタッフの皆さん

「ゴジラ松井」ことニューヨークヤンキース松井選手出身の地、根上に、民間国際交流協会「ねあがりカライダスコープ」が発足したのは 1994 年 4 月。その設立のきっかけは、旧根上町が人材育成事業として実施した「ねあがり創成塾」の国際交流部会修了生の有志の呼びかけでした。その国際交流部会の講師を勤められたのが他ならぬ秋尾晃正先生でした。

主な活動は、隔月で国際交流に関する講師（外国人・日本人）を招いてミニ講演会を開き、紹介する国のお茶とお菓子をいただく《ティ＆トークセッション》、近隣の市町に在住する外国人を招き、それぞれがお国料理を持ち寄って、文化交流を図る《ボーダレス・パーティ》。

書き損じはがきを集める活動が加わったのは 2000 年で、会員の一人が個人的に行っていた支援活動を会員に呼びかけたことに始まります。われらが恩師、秋尾先生が提唱される「ダルニー奨学金」に対し、全員一致で賛同しました。顔の見える支援活動としての信頼感もありました。

今年で 6 年目になります。この間、能美市の個人、団体の皆さんからはもちろん、地元、根上中学校のボランティアたち、近隣の市町村の方々、当協会のホームページを見て、遠く鹿児島県俵中学校から、また、東京の一女性からも書き損じはがきが届けられ、感激しました。多くの皆さんのご好意により、これまでに集めたはがき総数は 4,000 枚を超え、延べ 16 人の児童の就学を支援することができました。郵送されてくる「奨学金証書」の写真をながめて「一度、会ってみたいね」と話しています。そして、改めて「長く続けていこうね」と誓い合っています。

### 民際の広告を乗せたバスが町中を快走！静岡

ダルニー奨学金を支援する設計事務所が静岡鉄道経営のバスに広告を出すことになり、広告板作成（写真上）の経費を含めた広告代金を民際センターに寄付してくれました。こうして、後部に「ダルニー奨学金」の広告を載せた 1 台のバスが今年 7 月 31 日から 1 年間、ＪＲ静岡駅・常葉大学間など複数の路線を走っています。

サワディー・民際のボランティです

## 軽い気持ちで、好きな時間に

松澤　登

**子どもが大きくなって教育費がかからなくなり、多少の余裕が出来たので、最初は別の団体の会員になったのですが、どうも私が希望する支援事業とは違うと思って会員をやめました。その後、99 年だったと思いますが、たまたま妻が新聞でダルニー奨学金のことを知りドナーになりました。定年退職後、時間に余裕ができたので、好きな山登りを再開し、それでもまだ時間に多少の余裕があったので、2002 年 2 月からミンサイの事務所でボランティアをはじめました。**

**ボランティアをはじめるに当たって、内心、あまり気を使う仕事は避けたい、また、好きなときに来て、好きな時間だけお手伝いしたい、と思っていたのですが、ミンサイのボランティアは忙しいときで週 1 回、仕事がない月もあり、まさに条件にぴったりです。**

**私は支援もボランティアも軽い気持ちからはじめました。今でも軽い気持ちで事務所に来ています。それから、ボランティアは「している」というより「させてもらっている」という感じでしょうか、お手伝いできることに対して感謝の気持ちで事務所に通っています。**

# 連絡会ニュース

## 新規ドナー連絡会の紹介

■ **花・サバイディ**：2006 年にドナーになったばかりですが、家庭の都合で伸びようとする子どもの芽を摘ませたくない、との思いから連絡会を作りました（ドナーになったのも同じ気持ちからです）。ダルニー奨学金は支援する子どもが見えるので、自分の子どもと同じぐらいの気持ちで応援し、友人や知人にも呼びかけたいと思っています。（世話人　坂口吉子：TEL0955-72-8054：唐津市在住）

## 既存ドナー連絡会の活動

■ **ぷらいさに～**：「ホテルポールスター札幌」の無料展示ホールを借りてのパネル展示＆バザーも 3 回目となりました。初日から駒苫高校の甲子園準決勝・決勝、再試合と 3 日連続でバザー時間と重なり、人出が心配されたのですが、最終的には目標の奨学金 A タイプ 2 人分の売り上げを達成することができました。多くのドナーの方から励ましと物品のご提供をいただき、本当に感謝しています（バザースタッフ）

■ **ダルニーほほえみの会**：03 年 6 月から 2 箇所に募金箱を設置し、今年 2 月、ようやく 1 万円を超えて 1 人分の奨学金になり、中 3 のパチャラさんの写真と証書が送られてきました（写真右）。ただ募金箱を置かせていただいているだけなのにちゃんと奨学金になってしまうので、世話人としては誠にありがたいシステムです。募金箱を置かせていただいている富士山吉田口五合目の佐藤小屋さん、富士吉田のペンション諏訪の森さん、ありがとうございます。（世話人　渡辺幸男）

■ **尼崎ダルニードナー連絡会**：9 月 14 日、地域交流を目的に開催された「北戸の内地域交流会」に尼崎ダルニー連絡会も参加。コーラス、ハーモニカ独奏、クイズ、民族衣装でダンスと歌と賑やかに笑い、涙ありの楽しいひと時を過ごしました。プログラムには東南アジアからの留学生との交流があり、ラオスのパンパキットさんが「多くの方がラオスにおける教育の支援活動をしている事を知り大変感謝しています」と言われました。昨年は、ラオス研修の報告を兼ねて行いましたが、今年はラオスからのお客さんという事で多くの方が来てくれました。近隣友好の輪や支援の輪が大きくなり、尼ダ連のメンバーも 8 人から現在 20 名に増えました。（世話人　仲本恵美子＝写真前列最左、その右隣がパンパキットさん）

■ **はじめのいっぽ**：「はじめのいっぽ」の会員は、年齢も職業もさまざまです。育児や介護、仕事、居住地が遠い、などの理由で、なかなか一堂に会することができません。「このままでは、交流が途絶えてしまう……」と思い、「ひまわり通信」という情報誌を発行することにしました。会員同志の情報交換と、交流のきっかけになれば、と願っています。不思議なもので、情報を発信することで、私のところにも情報が集まってくるようになりました。（世話人　三好由美子）

## 毎夏恒例　奨学生に会うタイ東北地方の旅

遠州ダルニー連絡会　畑寛和

ペットと広井さん（前列）、後列は畑夫妻

**ここ数年、支援する奨学生に会いに毎夏、車でタイ東北地方を駆け回っています。今年もタイ人のプラシッドさんに運転をお願いし、私たち夫婦と友人の広井さんと 3 人で 3 人の奨学生に会ってきました。**

**ダルニー通信 40 号でも紹介した、広井さんの奨学生ペット（中３）に今年も会いました。母さんが亡くなり、お父さんがリゾート地のパタヤで再婚したと昨年聞きましたが、そのお父さんが 1 人で家に戻っていました。ペットの学校は統廃合を受け、新しい学校まで 42㎞。片道 1 時間半もかけて通っていますが、成績は学年でトップ。広井さんは「ツアーコンダクターになりたい」というペットに高校支援を約束しました。**

**私が支援するエンにも会いました。彼女が中学生のとき、学校の先生から「この子は成績はすばらしいのですが、家庭が貧しいので、高校の支援をお願いします」と言われ、高校生の現在も支援している子です。今回は初めて彼女の家を訪れました。10 坪くらいの、高床式ではなく地面に直接コンクリートを打っている家でした。家具はほとんどありません。お父さんは行方不明で、お母さんは出稼ぎに出、お祖母さんと暮らしています。以前は笑顔があった彼女の顔から最近笑顔が見られなくなりました。毎回、貧しい中で懸命に生きている子ども達に会い、「どこまで支援をしたらよいのか」といつも考えさせられます。と同時に、支援する側の私たちの生活を見つめなおす旅でもあります。**

## 事務局活用リスト

事務局ではさまざまな資料やサービスを用意して、ドナーの皆様のお問い合わせやご要望にお応えしています。ご利用につきましては、下表のとおり必要なものを同封の上ご請求ください。またご意見、ご希望、ご投稿もお待ちしております。

| | 項　目 | 対象 | 希望資料・依頼 | 同封する物など | 送料 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 募金箱を設置したい | タイ・ラオス | 取扱説明書及び申込書 | 電話、FAX メール依頼可 | 実費 | 随時受付。お知り合いのお店などにおいていただけるとありがたいです |
| 2 | 毎年忘れず奨学金を送金したい | タイ | 自動払込 | なし | 不要 | 新奨学生の支援にご活用ください |
| 3 | 奨学金や現地のビデオが見たい | | 展示パネル ビデオ | なし、電話依頼可 | 実費 | 1.「心の通う国際協力」(10 分)<br>2.「タイ奨学生感謝の来日」(NHK,20 分) |
| 4 | 奨学生からタイ語で手紙が来た | タイ | 手紙の翻訳 タイ語→日本語 | 手紙原本 | 80 円切手 4 枚 | 随時 |
| 5 | 奨学生の氏名をｶﾀｶﾅで読みたい | タイ | 生徒名のカタカナ表記 | 往復はがきで請求 | 不要 | 登録番号と生徒番号を明記して下さい |
| 6 | 奨学生に負担をかけず文通したい | タイ | タイ切手セット(12 回分) 千円 | 代金 返信用封筒 | 80 円 | 代金は郵便定額小為替か現金でお願いします |
| 7 | ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ希望 | | ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ登録票 | なし | 不要 | 作業の年間スケジュールを同封します |
| 8 | 個人で現地を訪問したい | タイ | 奨学生訪問の手引き | 返信用封筒 | 80 円 | 随時 |
| 9 | 地域や仲間で連絡会を作りたい | | ﾀﾞﾙﾆｰﾄﾞﾅｰ連絡会の手引き | なし | 不要 | 随時 |
| 10 | 書き損じはがき・未使用テレカ収集 | タイ・ラオス | 同キャンペーン 案内 | なし | 不要 | はがき送付用紙付き |
| 11 | タイ・ラオス奨学金のリーフレット | タイ・ラオス | リーフレット | なし | 不要 | 随時。ダルニー通信 42 号 5 ページ参照 |
| 12 | 奨学金のパンフレット | | パンフレットは振替用紙付 | なし | 不要 | 随時。タイ・ラオス(共通)とカンボジアの 2 種類 |
| 13 | はがき・テレカ収集箱設置 | タイ・ラオス | 折り畳式収集箱を送付 | 電話、FAX、メール依頼可 | 実費 | 送料をご負担いただけると助かります。1 箱(200 円)、2 箱(240 円)、3、4 箱(390 円) |
| 14 | ﾊﾞｻﾞｰ等でﾊﾝﾃﾞｨｸﾗﾌﾄを売りたい | タイ | | 電話依頼 | 送料実費 | 在庫に限りがございますので、お早めにお問合せください |
| 15 | カレンダー、ポストカードの購入 | | | 電話・メールで申し込み | 実費 | 随時。送料は数量次第です。ダルニー通信 43 号 9 ページ参照 |
| 16 | 使用済みインクカートリッジを集める | | 資料(メール可) | 80 円切手 | | ダルニー通信 37 号 4 ページと 38 号 9 ページと 41 号 10 ページを参照 |
| 17 | 進級・進学プレゼントをしたい | タイ | プレゼントセットカタログ | 返信用封筒 | 80 円 | 申し込み締め切りは 2 月 16 日(金) |
| 18 | 奨学金の説明を聞きたい | | 事務局説明会(無料) | 毎月第 2 水曜(12:30～)、第 3 火曜(18:30～)。質問にもお答えいたします。必ずご予約ください。遠方の方は交通費実費にて派遣可能。 | | |

**編集後記**：ある著名なニュースキャスターが、長期滞在して海外から戻った日本人に日本の印象について尋ねると、様々な意見がある中で必ず一致する感想があると言っていました。それは「日本の子どもの目がイキイキしていない」ということだそうです。一方、タイやラオスの研修旅行に参加されたドナーの方に研修旅行の感想を尋ねると、多くの方が「子どもの目がキラキラ輝いていた」と述べます。そう、そうなんです、私も同じ印象なんです。このギャップ、どこから来るのでしょうか？本号 11 ページの畑さんの記事に登場した小柄なペンは、通訳をした畑さんの目を見据えて「私はどうしてもツアーコンダクターになりたい。その資格のために高校・大学に行かなければなりません」とドナーの広井さんからの支援をお願いしたそうです。どこまで支援するかの問題はさておき、頼りない親をあてにせず、中学 3 年生にして自分の力で生きようとする気迫が伝わってきます。(冨)

**ダルニー通信　第 44 号　　2006 年 12 月 1 日発行　　発行人：秋尾晃正**
日本民際交流センター　〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 518　司ビル 301 号
振替口座：００１５０－０－５７６６４　TEL: 03-5292-3260 FAX: 03-5292-3510
ホームページ：http://www.minsai.org/　Eメール：info@minsai.org
表紙：　ラオス・セーコーン県カムコック村　　撮影：高橋厚子(民際スタッフ)　２００６年8月